

## 平成27年3月6日 オリンピック・パラリンピック推進対策特別委員会

○小林委員 初めに、第1章の大会ビジョンの中のパラリンピックへの取り組みについてお伺いします。

二〇二〇年の東京大会は、同一都市として初めて二回目のパラリンピック開催となることから、本基本計画の中でも、パラリンピック大会の評価が東京二〇二〇大会全体に対する国内外からの評価を左右するといっても過言ではないと指摘されております。

パラリンピックを意識した組織運営、パラリンピック競技の認知度向上、大会に向けた盛り上がりの醸成、パラリンピックのブランド価値向上という四点を意識した取り組みを展開していくとのことで、いずれも重要な視点で着実な実行性が求められますが、何よりもパラリンピックを通して広く障害がある方への温かな連帯を築いていかねばならないと考えます。

その意味からも、東京大会におけるパラリンピックの取り組みは、あらゆる障害者に対する社会の考え方を抜本的に見直し、障害者への優しいまなざしを持った社会を構築する契機とすべきと考えますが、見解をお伺いします。

○児玉オリンピック・パラリンピック準備局大会計画担当部長 大会開催基本計画では、大会ビジョンのコンセプトの一つである多様性と調和を実現する上で、パラリンピックの成功は極めて重要な要素であるとしております。

今後、組織委員会が、今お話にありましたように、パラリンピックを意識した組織運営やパラリンピック競技の認知度向上などの戦略的な取り組みを展開していきます。

都におきましても、パラリンピックを契機として障害者スポーツの普及啓発を積極的に推進してまいります。また、アクセシビリティガイドラインの策定により、ハード、ソフト両面のバリアフリー化の取り組みを一層加速いたします。

このような取り組みを通じて人々の意識を変革し、大会後のレガシーとして心のバリアフリーの実現につなげてまいります。

○小林委員 次に、第4章の大会を支える機能（ファンクショナルエリア）の中で、二点お伺いします。

まず一つ目が教育についてですが、主要目標の中で、オリンピック休戦プロジェクトを通じて、国内外においてその意義と価値に対する理解を推進し、世界の平和の実現に寄与すると記されております。

いまだ世界ではテロや紛争、戦争が後を絶ちません。そのような視点から考えると、五年後の東京大会は、日本の世界平和を希求する意思を世界にアピールするチャンスであると同時に、世界に平和を広げていこうとの私たちの決意が試される場でもあると思います。

ユネスコ憲章の有名な前文に、戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならないとありますが、あらゆる方法で二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックを平和の祭典にふさわしい大会とし、人の心の中に平和のとりでを築き行く祭典としていかねばなりません。

そこで、オリンピック・パラリンピックにおけるオリンピック休戦の意義についてお伺いします。

○鈴木オリンピック・パラリンピック準備局計画調整担当部長 オリンピック休戦は、スポーツを通じた平和と相互理解の促進というオリンピック・パラリンピックの理想につながるものであります。世界各国から多くの人々が集い、そして世界中が注目するオリンピック・パラリンピック大会に合わせて世界に向けて休戦を呼びかけることは、オリンピックムーブメントの目的である、平和でよりよい世界の構築に寄与するものであると考えております。

○小林委員 このオリンピック休戦という言葉は、まだ一般には余りなじみがない言葉ではないかと思えます。広く都民にアピールしていく必要とともに、特に、未来を担う子供たちに、そのような取り組みがオリンピック・パラリンピック大会で行われることをわかりやすく教えていくべきではないかと思えます。

現在、教育庁を中心にオリンピック教育が推進されておりますが、オリンピック教育や教育プログラムにおける取り組みの中で、単にスポーツの祭典ではないオリンピックの持つ幅広い意義を学び、平和への心を育むためにも、オリンピック休戦プロジェクトの意義を未来の宝である子供たちに伝えていく取り組みも今後検討していただきたいと思えます。

次に、観客の経験というファンクショナルエリアについてですが、このミッションとして、東京二〇二〇大会が観客にとってまたとない経験となるようにする、レガシーとして語り継がれる大会の興奮と感動を創出できるようにすると記載されております。

観客もオリンピック・パラリンピックを彩る大事な方々であり、東京大会を最高のものとしていくためには、選手や大会関係者だけではなく、観客に最高の経験を味わっていただく必要があると思えます。

そこで、ここで触れられている観客の経験という観点における主要目標を達成するために、今後どのような準備を進めていくのか、お伺いします。

○児玉オリンピック・パラリンピック準備局大会計画担当部長 二〇二〇年大会は、国内外から来訪する観客に対し、日本人の持つおもてなしを提供する絶好の機会であります。

大会開催基本計画の中のファンクショナルエリアの一つである観客の経験におきましては、おもてなしの精神で全ての観客を迎え、全員が自己ベストのサービス、機会を観客に提供することで、またとない経験となるようにすることが掲げられております。

観客に最高のサービスを提供するため、観客がアスリートとの一体感を味わうことのできる機会の演出、祝祭的な雰囲気醸成、大会観戦や大会関連活動に関する情報提供を実施するなど、大会組織委員会と密接に連携し大会準備に取り組んでまいります。

○小林委員 二〇二〇年東京大会において、観客がどういったことを経験できるのかということは非常に重要であります。

基本計画では、国内外の観客が自宅を出て帰宅するまでの道のりにおいて、適切なレベ

ルの多様なサービスを提供すると記載されておりますが、観客は競技観戦だけではなく、飛行機や電車などの交通、会場案内、ライブサイト、文化、教育プログラム、大会グッズの購入、食事、観光、宿泊など、ありとあらゆる経験を経験することとなります。それらのサービスの提供は、大会の運営主体である大会組織委員会のみでできるものではなく、都が積極的に関与し、関係機関とともに、観客が最高の経験ができるよう大会に係る準備を行っていただきたいと思っております。

次に、第5章の推進体制についてお伺いします。

ロードマップにおいて、二〇一五年から二〇一九年までは計画立案フェーズと位置づけられており、その中で、二〇一六年のリオデジャネイロ大会を踏まえ計画を改善する段階とされております。

東京大会はリオ大会から引き継ぐわけであり、当然、そこから学ぶ点は多々あるかと思っておりますが、どのような視点を持って、何を踏まえて計画を改善していくことを想定しているのか、お伺いします。

○児玉オリンピック・パラリンピック準備局大会計画担当部長 都はこれまでも、ロンドン大会やソチ大会の視察などを行い、大会運営に関して多くの点を学んできました。

リオ大会は、二〇二〇年東京大会の前大会として、会場運営やセキュリティー、ボランティア、盛り上げなどの状況を実際に現地で確認できる重要な機会であります。現地視察やIOC、IPCが実施するオブザーバープログラムへの参加を通じて大会運営の特徴や課題などを学び、東京大会を必ず成功に導くという視点から運営方法を改善するなど、その結果を有効に活用してまいります。

○小林委員 また、ロードマップの中で、各国オリンピック委員会、各国パラリンピック委員会への事前キャンプに関する候補地の情報提供について触れられております。

都議会公明党はかねてより、事前キャンプを、都内を初め被災地への積極的な誘致に取り組むべきと繰り返し訴えてまいりました。昨年の第二回定例会の我が党の代表質問において、局長より、リオ大会までに、各オリンピック委員会の参考となるよう、候補地情報を記載したガイドブックを作成してホームページで公表し情報提供する予定とのご答弁がございました。

そこで、事前キャンプの今後の予定及び事前キャンプの都内誘致に関する都の取り組みについてお伺いします。

○児玉オリンピック・パラリンピック準備局大会計画担当部長 事前キャンプが都内各所で実施されることは、開催機運の醸成に極めて重要であります。

大会組織委員会は、ことし一月に事前キャンプに求められる要件を公表するとともに、二月から三月にかけて、全国の自治体向けに応募要項の説明会を開催いたしました。また、四月以降に全国から要件を満たす候補地を募集し、リオ大会までに国内の候補地ガイドを作成してホームページで公表する予定です。

都は、昨年十月に、都内区市町村に対し、事前キャンプの概要や過去大会における実例

などについて情報提供を行いました。また、誘致に関する区市町村からの個別相談にも積極的に対応しております。

今後も、誘致に参考となる情報提供を行うとともに、各国オリンピック委員会などに都内候補地に関する情報を発信するなど、誘致を希望する区市町村を積極的に支援してまいります。

○**小林委員** 最後に、第7章、エンゲージメントについてですが、基本計画の中で、このエンゲージメントは、大会ビジョンを広く醸成し、国内外の人々とともに大会をつくり上げていく活動と定義されております。また、成功要因の一つとして、人々が能動的に参加できるプログラムを策定して、東京二〇二〇大会の成功に一個人として参画し、世界と未来に前向きな変革を起こした感動を共有することと記されております。

私は、このエンゲージメント戦略を行っていくに当たって、一九六四年の東京大会を生きた世代の方々と、二〇二〇年の東京大会でオリンピック・パラリンピックを初めて肌身で感じる青少年の世代に特に焦点を当てていくべきではないかと考えます。

私も地元の老人会などにお伺いし、一九六四年の東京大会がどんな大会だったかとお聞きすると、会場で観戦をした、テレビで見たなど、実に生き生きと当時を懐かしみながらも、笑顔で、時には熱く当時の思いを語ってくれます。ある意味、人生の中で二度も東京でのオリンピックにめぐり会える先輩方は、二〇二〇年大会における宝ともいうべきではないかと思えます。

このように、一九六四年の東京大会を経験し二回目のオリンピックとなる方々と、今回が初めてとなる若い世代に特に光を当て、両世代をつなぐエンゲージメントのプログラムがあれば、さらにその先の未来にオリンピックのレガシーを継承することができるのではないかと考えますが、最後に見解をお伺いします。

○**矢部オリンピック・パラリンピック準備局準備会議担当部長** 大会開催基本計画におけるエンゲージメントは、年齢、国籍、言語、障害等の有無にかかわらず参加できる多様なプログラムを企画、実施することで、多くの人々とともに大会をつくり上げていく活動でございます。参加者の中に生まれる、ともに大会を成功させたという実感を新たなレガシーとして次世代につなぐことが、プログラムに一貫した共通のコンセプトとして掲げられております。

委員ご提案の一九六四年世代と若い方々をつなぐことを含め、都として、こうしたエンゲージメントの考え方が実現できるよう、組織委員会と連携し、さまざまなプログラムを実施してまいります。